

| | |
|--------------|---|
| Title | 授業観察を用いた日本語教師相互研修モデルの構築 |
| Author(s) | 野瀬, 由季子 |
| Citation | 大阪大学, 2023, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/92901 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (野瀬 由季子)

論文題名 授業観察を用いた日本語教師相互研修モデルの構築

論文内容の要旨

本博士論文の研究目的は、国内の日本語教育機関において、立場や日本語教育歴などが異なる日本語教師が協働する活動として「授業観察」を位置付けた上で、各教師の授業実践の変革および学校組織の改革につながる「授業観察を用いた日本語教師相互研修モデル」を構築することである。

本博士論文は、序章を含めて全6章で構成されている。

序章「はじめに」では、研究の背景について説明している。日本語を必要とする人々の広がりや社会背景として、日本語教師教育において「自己研修型教師」(岡崎・岡崎, 1997)としての日本語教師の成長の機会を提供する必要性を指摘した。その上で、日本語教師の成長を支える「省察」と「協働」の2つの考え方を枠組みとして取り入れられて実施されてきた「授業観察」に注目し、日本語教師に対する教師研修(外部研修・内部研修)のうち、特に内部研修において「授業観察」をより展開していく必要性を論じた。

第1章「本研究における分析枠組み」では、日本語教師の発達への捉え方に関する筆者の立場として、日本語教師は他者との関係性の中に生きる存在と捉えることを示した。そして、日本語教師は学校文化に埋め込まれており、学校文化の形成に関わりながら他者との相互作用を通して自己のアイデンティティを獲得しており、筆者はこの過程を発達と捉えることを述べた。次に、本研究における日本語教師の「専門性」は、「省察的実践家(Reflective Practitioner)」(Schön, 1983)のモデルで捉えて分析することを述べた。そして、省察的実践家としての成長は他者とともにおこなわれる社会的過程であって、関係性によって支えられているという立場をとることを論じた。また、日本語教師の動的な専門性の獲得過程に焦点を当てることを述べ、授業観察を用いた日本語教師相互研修モデルの構築にあたって、日本語教育機関の「文脈」と、「関係性」の中で日本語教師が専門性を獲得していくことに着目した分析を行う必要があると考え、分析枠組みとして「専門家共同体(Professional Communities)」(Little&McLaughlin, 1993; Talbert, 1993; McLaughlin&Talbert, 2001)を用いることを示した。また、本研究の中で収集した多様なデータをどのように解釈していくのかに関する研究者自身の立場についても論じた。

第2章「授業観察に関する先行研究」では、初等・中等教育機関における授業研究の系譜と展開、大学教育機関におけるFD/ブレFDとしての公開授業・授業参観・授業観察の系譜と展開、日本語教育機関における授業観察および授業実践の共有の系譜と展開、の3つを概観した。そして、それぞれの教育機関で教師の授業変革を支える文脈について、1)マクロレベル(組織を取り巻く社会的情勢や公的支援)、2)メゾレベル(活動の実施に向けて活用できる制度やリソース)、3)ミクロレベル(組織内の教師間の関係性)、の3つの文脈のレベルに分けて考察した。さらに、日本語教育機関で内部研修の一環としての授業観察が普及しない要因を検討した。普及しないマクロレベルの要因として、日本語教育機関の内部研修の実施は各教育機関の努力に委ねられていることを述べた。また、同一組織の教師との協働を諦め、「消極的な選択肢」として外部研修しか学びの場がないという状況にある日本語教師がいる可能性を指摘した。授業観察が普及しないメゾレベルの要因としては、立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師が協働できるような内部研修の制度や仕組みが整えられていないことを述べた。そして、ミクロレベルの要因として、日本語教師間—特に専任日本語教師と非常勤日本語教師間—での関係性の分断が起こっていることを挙げ、立場の異なる日本語教師間での授業観察は実施のハードルが高い状況にあることを論じた。ここから、内部研修の一環として授業観察をする際に生じる問題を踏まえて、実態に合わせた研修モデルを提案していくことが重要であるとして、上記の研究目的に照らして以下の2つの研究課題を設定した。

【研究課題1(第3章)】

国内の日本語教育機関で内部研修として実施されている授業観察に参加する日本語教師は、それぞれどのような目的意識を持って活動に関与しているのか。特に、立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師間で授業観察を実

施す際にはどのような問題点が生じるか。

【研究課題2（第4章）】

立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師間で授業観察を実施する際の問題点を踏まえて、協働を促進するよう設計された授業観察は、各日本語教師の研修への関わり方にどのような影響をもたらすか。特に、協働はどのような要因によって支えられるか。

第3章「観察者と授業者が固定化した授業観察に対する日本語教師の目的意識」では、内部研修として授業観察を実施している日本語教育機関の実践に着目し、活動に対する各日本語教師の捉え方（目的意識と関わり方）の様相を明らかにした。まず、先行研究の知見をもとに授業観察の枠組みを【評価志向型】・【実践公開志向型】・【省察共有志向型】の3つに大別した上で、制度上は【評価志向型】で実施される授業観察（観察者と授業者が固定化した授業観察）を実施している法務省告示機関の日本語教育機関（X校）を対象に調査をおこなった。この研修に対する各教師の捉え方の相違を明らかにするため、専任日本語教師3名（観察者）と非常勤日本語教師3名（授業者）へのインタビュー調査を実施し、逐語化したインタビューデータをSCATを用いて分析した。その結果、観察者と授業者はそれぞれ、基本的には3つのうちいずれかの志向型を軸に授業観察を捉えながらも、組織で求められる役割や日本語教師との関係性によって、別の志向型の要素を同時に持ち合わせていたり、軸とする志向性を徐々に変容させたりしながら活動に関わっていくことが明らかになった。また、【評価志向型】の授業観察を制度として取り入れた場合、3つの問題点が生じることを述べた。具体的には、1）評価者（観察者）—被評価者（授業者）の関係性が生まれて相互の意見交換がしにくくなること、2）授業者が観察者に対して自身の授業意図や課題意識を自発的に共有するのは容易ではなく、結果的に授業者は授業を取り繕ったりフィードバックを受け止めているふりをしたりする状況が起きること、3）観察者が授業者の授業意図や課題意識について理解するための時間が十分に確保しにくく、授業者の省察に繋がらないフィードバックをしていること、の3つを挙げた。その上で、この問題は研修の形骸化を招く危険性があることを指摘し、今後は観察者と授業者の多様な関係性を考慮して、協働を促進する【省察共有志向型】の授業観察を展開していくことの可能性を示した。

第4章「観察者と授業者を往還する授業観察の設計・実施・評価」では、第3章で明らかになった3つの問題点に照らして、【要件1】ファシリテーターの介入を前提とした活動の設計、【要件2】授業者が授業意図・課題意識を事前に言語化する機会の提供、【要件3】観察者が授業者の授業に対する省察を促しながらフィードバックするための問いの提供、の3点を取り入れ、X校において【省察共有志向型】の授業観察を実施した。その結果、研修では、1）ファシリテーターによる研修時間内外での雰囲気づくりと定期的な連絡調整が協働を支える要素として捉えられていること、2）事前検討会では、授業意図・課題意識の言語化を通じた授業視点の拡大が各教師に生じること、3）事後検討会では、観察者が、授業者の視点に寄り添ったフィードバックをする場面と、一方向的なフィードバックをする場面の両方が見られることが確認された。また、各教師のワークシートや事前／事後検討会での発言の中には、ある教育技法の良し悪しやパワーポイントの扱い方のような技術面に関する学びだけでなく、自分が何を到達目標としているのかについて自らに問いかけたり、授業運営についての自らの考え方を客観視したりするといった学びが見られた。ここから、日本語教師の協働を促進する研修モデルのプロトタイプを検証することができた。

第5章「全体考察と結論」では、第3章（研究課題1）と第4章（研究課題2）の研究結果と考察を踏まえて、日本語教育機関における「授業観察を用いた日本語教師相互研修モデル」を定式化した。このモデルは「活動フェーズと活動内容」・「（研究参加者に対して）提供するもの」・「（日本語教育機関の）統括責任者の役割」・「ファシリテーターの役割」・「授業者／観察者としての研修参加者の役割」・「省察の対象」の大きく分けて6つの観点から構成されている。また、日本語教育機関の日本語教師の授業変革を支えるための支援として必要な点について、ミクロ・メゾ・マクロレベルの3つの文脈のレベルに分けて整理している。さらに、第5章では、授業観察の実施に孕む危険性への理解の重要性に言及しつつも、授業観察を用いた日本語教師相互研修モデルを構築する必要性について論じている。そして、研究の意義として、1）内部研修としての授業観察の実態に迫り、現職日本語教師の授業変革の機会として内部研修を積極的に位置付けたこと、2）各教師の立場や他の教師との関係性に着目しながら分析をおこない汎用性のあるモデルを提示したこと、3）立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師間での協働を促進する授業観察の実施に向けて実践的な知見を提供したこと、の3点を挙げている。最後に、本研究に残された課題と今後の展望について論じている。

論文審査の結果の要旨及び担当者

| | | | |
|---------------|-----|-----|--------|
| 氏 名 (野瀬由季子) | | | |
| | (職) | | 氏 名 |
| 論文審査担当者 | 主査 | 教授 | 岩居 弘樹 |
| | 副査 | 准教授 | 大谷 晋也 |
| | 副査 | 教授 | 義永 美央子 |

論文審査の結果の要旨

本論文は、国内の日本語教育機関において、立場や日本語教育歴などが異なる日本語教師が協働する活動として「授業観察」を位置付けた上で、各教師の授業変革および学校組織の改革につながる「授業観察を用いた日本語教師相互研修モデル」を構築することを目的としている。

本論文は、序章を含めて全6章で構成されている。序章では、日本語教師教育において「自己研修型教師」（岡崎・岡崎, 1997）としての日本語教師の成長の機会を提供する必要性を指摘している。その上で、日本語教師の成長を支える「省察」と「協働」の2つの考え方を取り入れている活動形態である「授業観察」に注目し、日本語教師に対する教師研修（外部研修・内部研修）のうち、特に内部研修において「授業観察」をより展開していく必要性を論じている。

第1章では、日本語教師の発達の捉え方に関する筆者の立場として、日本語教師は他者との関係性の中に生きる存在と捉えることを示している。そして、日本語教師は学校文化に埋め込まれており、学校文化の形成に関わりながら他者との相互作用を通して自己のアイデンティティを獲得しており、筆者はこの過程を発達と捉えるとしている。また、本研究における日本語教師の「専門性」は「省察的实践家」（Schön, 1983）のモデルで捉えて分析することを述べている。そして、省察的实践家としての成長は他者とともに起こされる社会的過程であって、関係性によって支えられている、という立場をとることを論じている。また、日本語教師の動的な専門性の獲得過程に焦点を当てるため、授業観察を用いた日本語教師相互研修モデルの構築にあたっては、日本語教育機関の「文脈」と、「関係性」の中で日本語教師が専門性を獲得していくことに着目した分析を行う必要があるとして、分析枠組みとして「専門家共同体」（Little&McLaughlin, 1993; Talbert, 1993; McLaughlin&Talbert, 2001）を用いている。また、本研究の中で収集した多様なデータの解釈についての考え方も論じている。

第2章では、初等・中等教育機関における授業研究の系譜と展開、大学教育機関におけるFD/プレFDとしての公開授業・授業参観・授業観察の系譜と展開、日本語教育機関における授業観察および授業実践の共有の系譜と展開、の3つを概観している。そして、それぞれの教育機関で教師の授業変革を支える文脈について、1) マクロレベル（組織を取り巻く社会的情勢や公的支援）、2) メゾレベル（活動の実施に向けて活用できる制度やリソース）、3) ミクロレベル（組織内の教師間の関係性）、の3つの文脈のレベルに分けて考察した上で、日本語教育機関で内部研修の一環としての授業観察が普及しない要因を検討している。そして、内部研修の一環として授業観察をする際に生じる問題を踏まえて、実態に合わせた研修モデルを提案していくことが重要であるとして、上記の研究目的に照らして2つの研究課題を設定している。研究課題1（第3章）は「国内の日本語教育機関で内部研修として実施されている授業観察に参加する日本語教師は、それぞれどのような目的意識を持って活動に関与しているのか。特に、立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師間で授業観察を実施する際にはどのような問題点が生じるか」である。研究課題2（第4章）は「立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師間で授業観察を実施する際の問題点を踏まえて、協働を促進するよう設計された授業観察は、各日本語教師の研修への関わり方にどのような影響をもたらすか。特に、協働はどのような要因によって支えられるか」である。

第3章では、内部研修として授業観察を実施している日本語教育機関の実践を取り上げ、活動に対する各日本語教師の捉え方（目的意識と関わり方）の様相を明らかにしている。まず、先行研究の知見をもとに授業観察の枠組みを【評価志向型】・【実践公開志向型】・【省察共有志向型】の3つに大別した上で、制度上は【評価志向型】で実施

される授業観察（観察者と授業者が固定化した授業観察）を実施している日本語教育機関（X校）を対象に調査をおこなっている。研修に対する各教師の捉え方の相違を明らかにするため、専任日本語教師3名（観察者）と非常勤日本語教師3名（授業者）へのインタビュー調査を実施し、逐語化したインタビューデータをSCATを用いて分析している。その結果、観察者と授業者はそれぞれ、基本的には3つのうちいずれかの志向型を軸に授業観察を捉えながらも、組織で求められる役割や日本語教師との関係性によって、別の志向型の要素を同時に持ち合わせていたり、軸とする志向性を徐々に変容させたりしながら活動に関わっていくことが明らかにされている。また、【評価志向型】の授業観察を制度として取り入れた場合に生じる3つの問題点を述べている。その上で、今後は観察者と授業者の多様な関係性を考慮して、協働を促進する【省察共有志向型】の授業観察を展開していくことの可能性を示している。

第4章では、第3章で明らかになった3つの問題点に照らし合わせて、3つの研修要件を取り入れた研修を設計・実施・評価している。その結果、研修では、1) ファシリテーターによる研修時間内外での雰囲気づくりと定期的な連絡調整が協働を支える要素として捉えられていること、2) 事前検討会では、授業意図・課題意識の言語化を通じた授業視点の拡大が各教師に生じること、3) 事後検討会では、観察者が、授業者の視点に寄り添ったフィードバックをする場面と、一方向的なフィードバックをする場面の両方が見られること、が明らかにされている。また、各教師のワークシートや事前／事後検討会での発言の中には、ある教育技法の良し悪しやパワーポイントの扱い方のような技術面に関する学びだけでなく、自分が何を到達目標としているのかについて自らに問いかけたり、授業運営についての自らの考え方を客観視したりするといった学びが見られたことを明らかにしている。

第5章では、第3章（研究課題1）と第4章（研究課題2）の研究結果と考察を踏まえて、日本語教育機関における「授業観察を用いた日本語教師相互研修モデル」を定式化している。このモデルは「活動フェーズと活動内容」・「（研究参加者に対して）提供するもの」・「（日本語教育機関の）統括責任者の役割」・「ファシリテーターの役割」・「授業者／観察者としての研修参加者の役割」・「省察の対象」の大きく分けて6つの観点から構成されている。また、日本語教育機関の日本語教師の授業変革を支えるための支援として必要な点について、ミクロ・メゾ・マクロレベルの3つの文脈のレベルに分けて整理している。さらに、授業観察の実施に孕む危険性への理解の重要性に言及しつつも、授業観察を用いた日本語教師相互研修モデルを構築する必要性について論じている。そして、研究の意義として、1) 内部研修としての授業観察の実態に迫り、現職日本語教師の授業変革の機会として内部研修を積極的に位置付けたこと、2) 各教師の立場や他の教師との関係性に着目しながら分析をおこない汎用性のあるモデルを提示したこと、3) 立場や日本語教育歴などの異なる日本語教師間での協働を促進する授業観察の実施に向けて実践的な知見を提供したこと、の3点を挙げている。最後に、本研究に残された課題と今後の展望について論じている。

このように本論文は、日本語教師当事者それぞれの立場や教師間の関係性に着目して内部研修に対する目的意識や関わり方の実態を明らかにした点、また、組織的な教育内容及び教育体制の改革につながる具体的な研修モデルを提案している点で有益な示唆をもたらしていると考えられる。また、さまざまなツールを開発したことで、本論文で提案された研修モデルを具体的に実施する可能性を高めているという点でも評価できる。その一方で、さまざまな研修スタイルがある中で特に授業観察に着目した理由・根拠が十分に示されていない、授業観察に焦点を当てたことで、授業方法や授業リソース、授業支援ツールなど言語教育のあり方を考える研修の必要性が見えにくくなっている点、分析対象として授業者、観察者以外に学習者の視点が必要だと考えられるがこれを扱わなかった理由が明確になっていないという問題点を指摘する事ができる。しかしながらこうした点は本論文の価値を減じるものではなく、全体として有意義な貢献を成す意欲的な研究であると評価できる。

以上のように、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。